
鷹と彼女と柘榴石

幻月 雲母

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鷹と彼女と柘榴石

【Nコード】

N1632T

【作者名】

幻月 雲母

【あらすじ】

「人は五感を思うように制御しようとした。だから俺達が生まれた」実に不可解なそいつがあたしの命を救ったことで何故かまたあたしは死に掛けるという脅威の負のエンドレスループが発生し始める。既にあたしの周りに正常な奴なんて居ないんだな、とつくづく思う。だからせめて、あたしを殺させないようにしてくれよ、頼むから。学園ファンタジーという名のコメディラノベです。

プロローグ

御伽噺やSF的ファンタジー要素なんてものを、あたしは端から信じてなど居なかった。

嬉しそうにあたしに語りかける母や父には悪いと思って黙っていたもののそんなもの有り得ない。それが何時でもあたしの想いだっ

た。

ニュースでサンタクロースが夏なのにプレゼントを無償で配り歩いている姿が報道されればもしかしたら未だに夢見る少女だったのかも知れない。だが、実際サンタって奴は実に身勝手な野郎であり、当然ながら夏に姿を見せるという出血大サービスを行ったことはこの十六年間で一度も無い。本当、たったの一度も。

居たらいいな、それは思っていた。でもそれに反比例してあたしは何時でもこう思ってた。

そんなもの居る訳が無い。

そう信じて止まなかったのが小賢しいこのあたしである。

まあ、第一にあたしは周りよりか幾らかは思考回路が冷めているような人間だ。クラスメイト達がきやつきやつきやするときでも落ち着き払って読書しているような奴だし、女子が恋の話に盛り上がってようとやっぱり本を読んでいる奴だ。

だからといって別に幼い頃に弟が見るスーパーだったり仮面を被っていたりするヒーローに憧れていなかった訳でも、もつと遡れば愛と勇気だけが友達という極めて可哀想なアンパンを一瞬でもカッコいいと思わなかった訳でも無い。そこは誤解しないで欲しい。

ただ、そういったものが遠い存在だから憧れる。そう考えていた。

でも、今はそんなあたしを掴み上げてやりたい気分だ。ついでに怒鳴り付けてやってもいいだろう。

お前は何を楽観視していたんだ、って。

あたしの記憶が正しければ確か、そう、あたしは学校の屋上から落ちたのだ。

別に自殺しようと思っただけで落ちました、とかそういうのではなくて本当にただの事故だ。下を覗き込んでいたらバランスを崩して物理法則に従って落ちた。それだけ。まあ、頭を打っていないとは言いがちなので断言は出来ないけれど。

で、次に目を覚ましたのが此処だったけれど。

何も無い空間だった。

というより、あたし自身が何も確認出来ない状況だったのかもしれない。

意識がなんとなくはつきりし始めた頃になってその前触れは急に起こった。

有り大抵な表現をすれば、声が聞こえた訳である。わーお、死後の世界ってこんな吃驚サプライズを用意してくれてる訳ですか。

「おい」何処からか聞こえて来る、というより頭に直接流し込まれているようなその声は気だるそうな男のもの。大方あたしと同じくらいだろうか。「死にたいか死にたくないか、答えてみる」阿呆かこいつ。死にたくないに決まってるだろう。

「そんなの……逆に死にたい人間が居るのか不思議ですけど」

恐怖とか混乱とかを覚えそうな状況なのに自分でも驚くほどに落ち着いていたのを覚えている。

だが、どうしてまたこんな質問を。という問い掛けをする前にその声は更に言葉を続けた。「俺はギブは嫌いだ」

「は……？」

「ついでに言うときギブ&テイクも嫌いだ。嫌いだが」

その一言だけが嫌に孤立して聞こえる。

「死に掛けのお前を助けてやった方がいい。ギブ&テイクでな」

ふてぶてしいその一言に終始黙り込む。

ん、あたしが、なんだって。死に掛け？ 死に掛けだって？ 全

くと言っていていいほどに分からないので言葉を紡ぐ。「それ、誰に言ってます？」

「お前」

なんだって。

今まで落ち着いていたのが嘘のように頭の中がごちゃごちゃになる。死に掛け？ あたしが。どうして。

「落ちたる、お前」呆れたようなその声にとある一場面が脳裏に浮かぶ。あ……あー、確かに屋上から落ちたね、あたし。駄目だ、頭打ったのかやはり。

え、というか、何、死に掛けるのか、あたし。

「だから端っからそう言ってるんだろ」鬱陶しそうにそう言い放つ声に対してのリアクションに困る。この際無反応でも許される気がした。

「おい」やっぱり駄目だった。「なんですか」

「どうするかって聞いてるんだよ。ギブ&テイクで生きるか、死ぬかって」

さて、どうしたものだろうね。

頭を打ったのだからどうかは知らないが少なからず多少なりとも正常な思考回路は動いているらしく見ず知らずの奴を信用するのか、と怒鳴りつけている。そりゃ信用出来ませんとも。

しかもギブ&テイクと来た。ということはあちらがテイクして来るのならあたしも何かあちらにギブしないといけないのか。その疑問に気付いたのか向こうが声を発した。「お前は俺にちよっとしたことをしてくれればいい。命に代えられるもんはないだろ」……言ってることは確かに正しい。

「本当に生かしてくれるんですよね？」

「約束する」

疑わしい部分は多々あるもののほぼやけくそになってその回答を口にした。

「分かった、生かして下さいな！」

微かに笑い声が聞こえた。「じゃあ、決まりだ」

瞬間、あたしの意識は遠くへ消える。

プロローグ（後書き）

初めまして、以前にもこちらに別の名前で投稿していた者です。

ファンタジーが書いてみたい、という思いで分からないなりに必死にやっけて行く予定なのでお付き合い頂ければ幸いです。

？

次に目が覚めたら、あたしは親友の腕の中だった。

「っ……むーちゃん……！」泣きじゃくる親友、あたしに百合の趣味があっただけ、などと思回路が忙しく働いてから鼻を掠める薬品の匂いでようやく事態を思い出した。「病院？」そりゃ学校の屋上から落ちれば普通は病院送りか。

それからあたしの親友はようやくあたしのことを開放したかと思うとまた泣き出した。うあああ、やめてくれい。「よかった、生きててよかったあ」親友のことを勝手に殺さないで欲しい。

「御免なさい、桔梗」

黒髪を三つ編みにしている美女、遠山とおよま 桔梗ききょうがあたしの親友だった。

うちの学校の制服である茶色のブレザーに、ラベンダー色のスカートを着こなしながら高校二年生の生活を最高にエンジョイしている親友、桔梗。彼女の顔を見たら本当にあたしは生きてるんだな、と実感した。

で、あたしが彼女に心配を掛けたのは事実らしいのでそれだけは言うておくこととする。

「本当に、むーちゃんの馬鹿。心配したのよ」

「謝ってるじゃんか。御免、って」

窓の外を眺めながら不意に、何かの頭の中を駆け巡る。

ギブ&テイクであたしを助ける、そんな台詞を先刻言われたような気がしてならない。「桔梗、不束なことを聞くと思うけど」救急車が更なる患者を運んでいる風景が目に入る。「あたしにギブ&テイクで第二の生命を与えたりしてないよね？」

「むーちゃん、あんたどうしたの。頭打ったの」

まるで可哀想なものを見る目をして桔梗があたしを覗き込む。「むーちゃん、うおうう、その瞳をやめて下さい。「御免、なん

でもない」そう言つて首を左右に振る。

やっぱり夢、だよ。そんなことを考えながら布団の中に潜り込んだ。

あたしの親は、まあ、言っちゃえば居ない。

正確には逃げた、とでも言うべきだろうか。否、そのニュアンスも違うか。ならやはりこう表記しよう。

旅行に出かけているのだ、あたしの親は。

昔からの悪い癖である。我が親の。娘を置いていくのもどうかと思つけれど何を言つても無駄だし、お土産に買ってくる飴玉は何故か美味しいので文句は言わない。後付の理由だけ。

だからこそあたしは高校二年という身分でありながらにして社会という大海原に一人投げ出されていて、そんなあたしを面倒見のいい桔梗が心配してくれているのだ。

彼女は散々「苺オレを飲みながら屋上に行くのは暫く禁止」だの「というか屋上に行くな」だの「つーか学校に行くな」とか言つていた。正直、あまり真面目に聞いていなかっただけ。「そうだ、わたしと一緒に暫く此処に居ましょう」その提案は流石に拒否したけど。

「それじゃあむーちゃん。また明日来るわね」そう言つて、夕刻頃、桔梗は家へと歸つて行つた。「本当に大丈夫？ やっぱりわたしものこ」心配しないでいいから、そう半ば無理矢理説得して。

独りぼっちの病室に、あたしの呼吸音とテレビの声だけが反響する。話し相手が居ないのはやはり致命的だ。

何の前触れも無かつたんだ。それまでは、本当に。

真っ白な天井を黙つて眺めていると「おい、起きろ」唐突に腕を引つ張られて起こされた。「っな」命令口調な台詞に力チンと来て、何処のどいつだと横を見ると終始言葉を失つた。「……どなた？」

間抜けなことにこれがあたしの第一声。

赤毛を後ろで結んでいて、消えかけの電灯が微かにあたしに見せるその瞳の色は紅色だった。赤？ 赤い目、って本当に存在するんだ。という俄かな感想を抱きつつ、ジーンズに黒いジャケットという服装に戸惑う。「てめえ、俺のことを忘れたとは言わせない」本当に申し訳ないのだがあたしにこんな怪奇君な友達は居ない。あたしの友人で頭が可笑しいのは唯一無二で桔梗だけだ。「あの、本当に知らないんですけど」首を傾げてそう言えば相手は怒気を孕んだ声で言い放った。

「とぼけんじゃねえ、確かにてめえだ。俺が覚えてるんだから、お前も覚えてるだろ」

「んな無茶苦茶な」

そういうのは想いの一方通行と言っただろう。

とまあ、そんなことをいえるほどあたしに度胸は据わっていないので「いや、本当に御免なさい。覚えてないんです」と頭を素直に下げる。そうそう、素直に謝れる人材ってとっても大事だ。

だが、向こうはそんなあたしの希少価値が分からないのか「ふざけんのもいい加減にしろよ」とその瞳で睨みを利かせて来た。「俺はお前を生かしてやった張本人だろうが」そこでようやく、少し前の出来事では出会った声を今の彼の声が一致する。

「なんですと」

深夜の病室に、あたしの抜けた声が反響した。

？（後書き）

少々修正致しました。申し訳無いです。

？

事態を理解したあたしが次に行ったこと　それは回避行動だった。

「え、ちよ、無理無理。お願いだから食べないで」貧困なあたしの脳ではこれから何をされるかという質問にそういう回答しか出せなかった。「あたしは美味しくありません！」本当だよ、最近野菜しか食べてないから美味しくないよ！「馬鹿かお前は」一人焦るあたしに赤毛男はそう吐き捨てた。「心配せずともお前みたいな不味そうな奴は食わない」なんだろう、命の危機こそ回避できたのになんとなく腹立たしいこの気持ちは。

あたしの複雑な心境とは裏腹にそいつは目の前の椅子に腰を下ろすと「お前、五感って分かるか」こいつ、馬鹿にしてんのか。「分かりますけど」精一杯低めの声音でそう言うのと更に付け足した。「視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感ですよね？」こくりと、首が振られる。

「人間ってのはその昔、それら五感を、生き物を器に思うように制御しようとした。まあ、結果的に失敗だったんだが」

と、遠慮も何もなしに机の上に乗ってた林檎を咀嚼すると「俺はその失敗作の視覚の化け物、ってとこだ」ごくん。飲み込まれた。

意味が分からない、しかく？　視覚の、なんていった？　化け物？　ざけてるのか、こいつ。

自分の言葉があたしを混乱の淵に陥れていることに気付いたのか「まあ、直ぐに理解なんざしなくなっただっていい」再び、咀嚼。しゃりしゃりという音がその場に響く。「ただ、お前の身体を借りておきたいという話だ」いきなり何か言い出したぞ、こん畜生は。

「な、なんで」最もな疑問だ。いいぞ、あたしよ。「さっき言った通り俺達は失敗作だ」と次いで蜜柑に手を出すこともあるうに皮ごと食い出した。苦くないのか、皮は。「俺達だけの力ではこうし

て人間体であることだけでも精一杯だ」ごくり。飲み込んでから皮だけが床に吐き出される。「そこで、お前達人間の望みを叶えて、代わりに時々身体を使う。そういう話だな」

「そ、そんな勝手な」

あたしの言葉にギロリ、と彼はこちらを睨んだ。「ギブ&テイクの選択肢を提示した時に了承したのはどいつだ」それを言われると反論は出来ない。黙り込んでいると「なんだったら、今此処でお前を殺してやったっていいんだぞ。何もお前でなければいけない理由なんて何一つ無いからな」そう言ってまた林檎を咀嚼し始める。

「ギブ&テイクのあたしのテイクが、あなたに身体を貸すことな訳？」何時の間にか敬語が外れて、何時も通りの口調で、そんな風に尋ねれば「そうだ」なんの迷いも躊躇も無く肯定される問い掛けに溜め息をつきかける。

今年で十七の乙女の身体を借りようとはなんたる野郎であろうか、ああ、だから言わんこっちゃ無い。と、あたしの深層部分で眠っていた神経がぎゃーぎゃーと騒いでいる。

それでも殺されるのはこれはこれで困る。生きるか死ぬかならやっぱり生きるを取るのが人間だろう。勿論この話が頭が残念な子の創作だったり、ホラ話じゃないという証拠はないし、寧ろそっちの可能性の方が高いと言っても過言じゃ無いかもしれない。それでも「分かった」

溜め息を押し殺しながら続ける。「貸してもいいよ、身体」吃驚するくらい飲み込みのいい奴だ、あたしは。こんな人材中々居ないぞ、ほいほいと納得するような奴。

「どの道お前にはそれ以外の選択は無いがな」

軽く鼻を鳴らしながらそっぽを向くそいつに「何時まで貸してればいい？」

「無期限」

廊下に灯る照明を睨みつけながら言う奴に更に尋ねる。「名前は」くるりと振り返って、驚いたようにこちらを見ている。「名前。呼

ぶとき不便だから教えて欲しいんだけど」

「グルナ」

何処か不機嫌そうにそいつは、グルナは言い放った。それからあたしのことを暫し眺めてから目を逸らし、逸れきり何も言わなくなつた。「可愛くない奴」ぼそりと呟いてみても反応は無かつた。

「グルナー」やっぱり話し相手が居るのに話せないのは中々退屈なので口を開く。こんなにあたしはお喋りだっただろうか、なんて頭の片隅で考えつつ、もだ。

「動物が貴方達の器なら、あんたはなんの動物？」

そう問えば不思議そうにあたしを見て、「鷹」それだけ言つて視線を逸らす。

「鷹、って鳥の鷹？」

「んだよ、文句あんのか」

「別に」

ただ、鷹にいい思い出はない。詳しく話す予定は無いけれど。

「お前……変な奴」まるで異端物でも見るかのようにグルナはあたしを見てからいきなり立ち上がった。「どうしたの」問えば「来た」

？

「何が」問うてもグルナは答えようとはしなかった。

その場をただ静寂が支配して、身動きが取れない。「ねえ、グルナ、今度は、グルナが手を差し出してあたしのことを停止させた。「黙れ」そんな一言を付け加えて。

瞬間、まるで見計らっていたかのようにカツカツ、という靴の音がその場に反響する。「やあ、グルナ」テノールとバスの間ほど、不快でもなければ愉快でもない声音は当然あたしの知るものではなく、またグルナを指定していた。「宿主が見付かったみたいですよ」その声にグルナはこちらにも聞こえるくらいの音で舌打ちした。

「フィール、なんでこんなとこまで来ててめえの面を見なきゃならないんだ」

深く考えるまでも無く、グルナは相当機嫌が悪そうだった。「そんな怖い顔しないでくれよ」ようやく、声の主が姿を現した。

黒いフードを被せているものの腰まである青い髪をまつすぐ下ろして、綺麗な青い瞳がこちらを見ていた。整った顔が、屈託の無い笑顔をこちらに向けている。見た目、十代くらい。「へえ、君がグルナの宿主？」あたしを捕らえた瞳が終始、動こうとはしなかった。フード付きのジャンパーに紺のジーンズが見える。

「何の用だ、この通り俺は大変忙しい」

あからさまに不機嫌オーラを醸し出しているグルナに「ああ、御免」とそのフィールさんなる人は再びあたしを見て「んじゃ、用件だけ素早く済みますよ」とこちらに歩み寄って来た。

その瞬間、ぴくりとグルナが微かに動きあたしの前に立った。「

おい」

「なに？」

「お前、なんでこの女に近付く」

そう、グルナに睨みつけられると彼は不愉快そうに顔を歪め「そりやさ」と先程まで浮かんでいた笑顔とは異質の、含みのある笑みを浮かべて答えた。「殺すためっしょ」刹那、彼の右足がグルナの左腕にのめり込んでいた。一瞬の出来事。それでも、常人たるあたしを衝撃の淵へ叩き落すのは簡単過ぎた。

「何？ 庇う気？」

「……………」

何も言わず、ただフィールさんを睨み付ける奴に、彼は微かに笑いを漏らした。「宿主に死なれたら困るから？ それにしたって、君らしく無いじゃない」

「うっせえ！」

怒鳴りつけるようにそう言い放ち、その右側の足を振り払うと「おい、お前」とグルナがあたしを見下ろした。「いい機会だ、見せといてやる」

「な、何を」

「お前がこれから俺に加担してやんなきゃならないことをだ」

それだけ言うと、これ以上の説明は面倒なのかあいつは白い床を蹴り上げて身体を浮かすとフィールさんの背後に回りこんだ。「お、やる気？」対するフィールさんもフードをたくし上げるとグルナを見返した。

「こつちも殺されちゃ困る事情って奴があるんでな」

「へえ、それは気になるなあ」

此処までのやり取りを見て、あたしは本当になんとか面倒なことに巻き込まれてるんだな、という感想を抱いていた。それ以上でも以下でもなく、ただそれだけのことだった。

「いいか、こいつも俺の同類だ！」左足を蹴り出しながらグルナがいきなりそう言い出した。「は？」思わず聞き返すと「こいつは、聴力の化け物だ。因みに器はイル力な」受け止められた左足を軸にして、右足で蹴り飛ばす。再び、グルナとフィールさんとの間に距離が生まれる。

「仕方ねえな」もう一度聞こえた舌打ちと共に「本当はもう少し後にするつもりだったんだがな」と一歩踏み込んで行く。

因みにそのとき、あたしの脳内は少し遅れて状況理解に苦しみ、疑問符で一杯だった。

？

「ふえ、あう、えと？」何が起こってるのかさっぱり分からない。

よし。こういうときは回想に浸ってみるのが一番だ、思い出してみよう色々。ええと、なんだっけ、このフィールさんなる人はあたしを殺すために来たとかどうとか言っていたな。殺す？ 誰を？ あたしを？ なんの必要があつて。知るかなもん。でも、彼があたしに手を出したらグルナがやり返して、蹴つて殴つての繰り返しがあたしの目の前で繰り返されて、それで「訳が分からない！」結局また元通りになる回答。

「グルナ！ なんなの、あたしは何に巻き込まれそうになってるの、宿主』つてなに！」
「黙れ、後で説明する」

後じゃ遅いんだよ、後じゃ。今説明して貰わねば、疑問という名のくもの巣に絡まりに絡まったあたしがどうともならないじゃないか。

「可哀想にね、何も理解出来ないまま死ぬんだから」可哀想だと思ふなら端から殺さないで欲しい。そういうのは、言葉の綾じゃ済まされないぞ、と一人心中でぼやく。流石に口に出したらあたしが惨い死に方をしそうで嫌だ。というか、殺すならせめて遺書を書かせてくれ。ついでに弟の夕飯を三年分ほど作る猶予が欲しい。

と、そんな風に混乱の淵に陥るあたしではあったものの、たった一つだけ大いに理解できることがあった。

こいつらは絶対に人間らしからぬことをするつもりだ。

それを理解した理由その一が、目の前のグルナの尋常ならざる様子だった。鋭い目つきであったりとか、そういうのは別にどうだっ

ていいのだが問題は奴から感じる熱気にあつた。「あつ……」思わず顔を顰めるほど、熱を帯びている。しかし、張本人はと言えば特に変わった様子も無く、相手を睨みつけているだけだった。

「もう、言い残すこと無いよね」酸素不足にでも陥ってしまったそうになっていると急にその空気が一新された。その場にはどうしてか、二層の空気が出来上がって居るのである。小学校の頃に習ったとおり、冷たい空気が下で、暖かい空気が上にある。ん、冷たい？

違和感を感じてグルナの背の後ろからフィールさんの周りに薄い靄のようなものが掛かっている。冷氣、恐らくそれなのであろう。そこまでの観察をなんとか終えた辺りであたしは息を吐き出した。

「なるほど、あんたらが人間じゃないのは痛いほど分かった」

それから再び「お願いだから食べないで下さい！」ほんともう、マジで入院生活のストレスで本当はあたしの頭が可笑しくなっただけかと思つてたけどマジもんだよこいつら！ あたし食べられるよ！「せめて、せめて遺書を書く時間を！」

「だからお前みたいな不味そうな奴は食わないつつただらうが」

ひくひくと表情筋を引き攣らせ、更に不機嫌そうに見せる為勤めるグルナに「あたしはそんなに不味くない筈！」と勝手に断言する。こ、これでも一介の女子高校生だもの。

あたしの行動に呆れたように前を見据えて黙り込むグルナとは対照的に「御免、僕草食だから」とフィールさんがベジタリアン申告をして来た。な、なんてこつたい。そうか、イルカとか言ってたなイルカは草食なのか、へえほう。

「これでいい？」フィールさん（ベジタリアン）が小首を傾げて、青い髪をだらりと垂らす。「もういいよね」「全然よくないな」

その台詞に合わせるかのように小規模な爆発音、でも少なからず爆竹鳴らしたとかそういうレベルでは無い。

目を瞑っていたからか、全く持つて事態が理解できていないが目を開くと水滴が蒸発した形、つまるところ水蒸気はその場に充満し

ていた。

「気に入らない」蒸気に包まれながら吐き捨てるかのようにグルナが言う。「なんでお前が俺の宿主を殺す」

「それが僕の宿主の願いだから、かな」

今度は目を閉じている余裕すらなかった。

何を隠そう、誰でもないあたしの真横に深々と何かが刺さっている。氷柱状というか、最早氷柱そのものが。頬を冷たい空気が撫で、同じくして生暖かい液体が一筋流れた。「てつきり俺への嫌がらせかと思った」そこにグルナの手が触れた。すると、それはじわりじわりと溶け出して、水へと戻って行く。「別にそのつもりはちつとも無かったんだけどね」シートへと、それが染みを作り出した辺りで「グルナの宿主だっただなんて予想外だよ」と笑んでから「また今度出直すや」運動靴が足音を鳴らして、彼がこの場を去ったことを示した。

「二度と来るな」

吐き捨ててから、奴があたしの方を向いた。

？

「おい」グルナの低い声に肩が揺れた。「見てたか、今の」首を干切れんばかりの勢いで振って、肯定する。

「な、なんなのあれ」

当然の如き言葉をぶつければ「まあ、あれだ。お前から言うところの魔法みたいなものと認識してくれ」なんというファンタジックな展開なんだろうか。最早、ホラ話とか嘘とかそういうことを言っただけでいられる段階では無い。マジなんだ、こいつらは。

「詳しいことを言えば俺が炎であっちが水」

と窓の外を睨み付けるグルナに「あんたの同類ってどれくらい居るの」

「俺と奴を含め五人。五感だからな」

単位は『人』なのか、と突っ込もうか迷ったが一応自粛することにした。それどころでは無いのだから。要するにこんなのがまだあたしの知らない中で三人も居るのだ。「またあたしは殺され掛けるの？」問い掛ければ奴はやっぱり不機嫌そうなままで言い放った。

「かもな。まあ、殺させはしないが」

一晩経っても、それは夢では終わらなかつた。のっそりと起き上がれば壁に凭れてグルナは寝息を立てていて、あたしは溜め息を吐き出した。

その日のうちに、あたしは退院する次第となった。どうも医者曰く『学校の屋上から落ちたというのに異常なまでに正常です』だそうで、よもやグルナの所為では無かるうかという疑問も過ぎたが追及はしないでおいた。正直、また面倒なことになりそうだったか

ら。

まだ学習中の桔梗に『今日退院しました』というメールを送りつけてから叔母へと電話を掛ける。

母の妹、つまりあたしからすれば叔母さんはあたしと中学三年の弟、ついでに大学生の居候の面倒を見てくれている。彼女からは『気をつけて帰って来るのよ』という通達を受けた。

同居中の大学生にも電話を掛け、全てが終わってから「付いてくるの？」とグルナに問い掛けた。

「当たり前だ」

「うぐぐ」

そりゃあちらにもあちらの事情があるのだろうし、またフィールさんみたいなのが出てくるのは非常に面倒というか危ないので寧ろ一緒に居た方が賢いのは分かる。だが、実質家まで来られると大変迷惑だ。

「どうしても来ないと駄目？」赤い瞳があたしを捉えた。「駄目だな」反射的に肩を落とす。

そんなことをしているうちに纏め終わった荷物を担ぎ、病室を後にする。「ほら、来るんでしょ」グルナに手招きをしながら、さて、叔母さんにどう言い訳をしたものかと考える。犬猫鳥じゃあるまいし、「拾って来た」じゃ不味いことは重々理解している。まあ、あの意味鳥だが。かと言って本当のことを話すわけにも行かない。

そうだ、この際「彼氏です」と連れて行くのは、駄目だ。あたしのプライド部分が受け付けないと悲鳴を上げている。叔母さんにも無駄な心配を掛けてしまいそうで嫌だ。もうともかくその線は満場一致で却下だ。

看護婦さんに一礼して、自動ドアから一步前に出ると生暖かな空気があたしの頬を撫でた。四月、そんな季節だったということに改めて自覚した。

「生暖かい」

思ったことをそのまま口にしてから僅かに目を細める。

帰路を歩き続けながら時折後ろを振り返ると、目を逸らしようも無くグルナが黙って付いて来ている。「ねえ、グルナ」声を掛ける
とようやく奴はこちらをちゃんと見た。「なんだよ」

「あんたらが人間じゃないこととかそういうのはなんとなく分かった。で、確か、あんた言ってたよね。自分は『失敗作』だ、って。其処が気になるんだけど」

他にも聞きたいことは多々あったものの優先順位をつけるとかそういう細かいことはせず、一先ず一番最初に浮かんだ疑問を投げ掛ける。

「別に。言葉のままだ」塗装された道路を踏みつけながらグルナが言葉を紡ぐ。「昨日も言った通り、昔人間は五感を思うように制御して、最強の存在、言うなれば戦闘兵器を創ろうとした」青い空を見上げていた瞳がこちらに向き「だが我武者羅にやったところで上手く行く筈が無い。其処で力の器としてそれぞれの能力が優れている動物を使って、俺達という存在を生み出すことには成功した。奴らは俺達のことを『イム』と呼んだ」細かい方法が偉く量された説明だな、という不満の意思を伝えれば「言ったところでお前には到底理解できない」その通りかもしれないので仕方なく口を塞いだ。

「最も、俺達は人間なんざに利用されるのは更々御免だった訳で反抗して、力も碌につけないまま創り手の元を離れた、ってことだ」
なんとなく程度しか理解出来ないものの「ふうん」と曖昧に返事をして「それぞれ位前の話？」

「ざつと千年だな」

あまりに桁の違う数字に固まってしまった。

？

取り立てて話す話題も無かった為か、気付いたらお互い無言になっていた。

いや、あたしとしては何かもっと聞くべきだったんだろう。けど、その発想が思い浮かばずにと同じ疑問を頭の中でループさせ、自分の中で打ち消していた。

あたしは、これからどうするべきなんだ。

こればかりはグルナに聞いてどうにかなる話題じゃ無いことを充分に理解していたし、だからこそ問い掛けなかった。

視覚の化け物との強制ドキツともしない共存生活、聴覚の化け物から狙われる一般人な女子高生^{あたし}の命、他まだあたしが知らないだけでこういう奴らが少なくとも三人居る。頭が痛い。

二人分の靴の音がやけに頭に響いた。「ん？」不意に、片方が止んだ。

「どうしたの、グルナ」

「……………」

あたしの問いには一切答えず、唐突にしゃがみ込むと「シャーレか。居るもんだな、こんなところにも」

そう言っただけ上がったグルナの手元には抱きかかえられるほどのサイズの小さな桃色毛玉が居た。「むきゅっ」奴の腕からひよっこりと小さな顔が出て来た。

丸い顔には、円らな緑色の瞳と金色とも取れる角が生えている。

「羊？」にしてはサイズが小さすぎるか、と思っていると「そんなもんだな」阿呆。桃色の毛並みに羊が居るものか。

そんなあたしの独り言という名の心情を察したのかグルナはあか

らさまに溜め息を吐き出すと続けた。

「俺らの同種。ただしこいつらは五感じゃ無く『夢』を食べる……バクと同種類だと考えればいい。ただ、俺と同じでこいつらにも器がある。大方こいつは羊だったんだろう」

バク、夢を食べるといふ神話上だかなんだかの生き物だ。まあ、そもそも目の前の奴がそういう類なので最早信用しない理由が無くといつか信用するしか無く「ふーん」とだけ返してその頭を撫でた。「ふきゅー……」あたしに撫でられるのが気持ちよかったのか、「シャーレ』というらしいミニ羊は緑色の瞳を細めた。

そんな一連の様子を眺めてからグルナは『シャーレ』を抱いたまままで歩き出した。

「連れて行くの？」

「別に。勝手だろ」

あたしの言葉に相も変わらず可愛げの無い返答を返すグルナではあるが自然とあたしの中では先程まで募り続けていた苛立ちというものもは起きて来なかった。

なんとというか、少し意外だったのだ。あたしの中では『シャーレ』のことなんざ簡単に見捨てると思っていたのに。無論、放って置くわけにも行かないのでその後、拾うつもりだったが。

案外、思ってるより悪い奴でも無いのかも知れない。

微かな希望を抱きながらあたしもまた一步踏み出した。

太陽の光を浴びたアスファルトの温度は、勿論ながら伝わってなど来なかった。

住宅が立ち並ぶ区域にある一軒家、決して広くもない三階建てがあたしにとっての我が家だった。

「いい、グルナ。絶対変なことしないでよね。あ、あんたも」とグルナと（無意味だと思つが）『シャーレ』に言い聞かせた。グルナの方は「ふん」と顔を逸らすだけで『シャーレ』はあたしの言葉が伝わったのかは定かでは無いが「んきゅー」という肯定とも取れる返答をくれた。

意を決し、扉を押すと無用心なことに鍵は掛かつておらず僅かな力で扉が開く。「ただいまー」声を掛けても、返答は返つて来ない。仕方が無いので靴を脱ぎ、奥まで進む。キッチンの方まで真っ直ぐと進めば卵の甘い匂いが軽く鼻腔を掠めた。

「あ、お帰りなさい。むっちゃん」

欠々に聞く威勢のいい声に「うん、ただいま。真幌さん」と笑みを返す。

水連寺すいれんじ 真幌まほろ、うちの叔母さん つまりこの家の主 と知り

合いだつたのを切つ掛けに居候中の大学生のお姉さん。柔らかい笑顔は茶色の髪とよく合っていて、こちらまで和ませてくれる。しかし愛らしい顔立ちとは裏腹に、お洒落には興味があまり無いらしく普段から黄色に白いラインの入ったジャージを好んで着ている。

ピンク色のシユシユで一つに纏められている茶色の髪を左右に揺らしながらフライパンと向き合っていた彼女は一度手とガスを止めると「今日はね、むっちゃんの好きな玉子焼き……」其処まで言い掛けてから振り返つた彼女は動きも止めた。

？

真幌さんは心底不思議そうにグルナとあたしの間で視線を行ったり来たりさせていた。

まあ、そりゃあ見ず知らずの男をあたしが連れ込んだら驚くだろう。「何そのちっこいの！」彼女が指差す先には「シャーレ」が居た。「え？」

あまりに不意打ち攻撃であつたが固まるあたしに真幌さんは構わず「何このちっこいの！」

ピンク色の毛玉を手の中で変形させながらニコニコとする真幌さんに「えつとお」と言葉を詰まらせる。さて困つた。あたしはグルナに対しての質問の対策を考えていたのだ。「シャーレ」に関しての言い訳は考えていない。

一応グルナを一瞥してみるも奴は真幌さんが「シャーレ」を撫で回す様子をただ見ていた。なんて勝手な奴だ。

「んと、えと、み、ミニシープ！」

とても苦しい言い訳だと思いつつ「そう、ミニシープなの。ええと、品種改良の極みでね道端に落ちていたのを偶々拾つて」意外と間違つては居ない気がするのあたしだけだろうか。「シャーレ」もグルナと同じで生き物を器とした（以下省略）なので品種改良といえないことも無いだろうし、道端で落ちていたのを拾つたのも事実だ。

彼女は茶色の髪を僅かに揺らし、沈黙を保つてから「技術の最高峰だね、分かります！」こういつちゃなんだかちつとも分かつてないよ、真幌さん。

だが、こつ都合よく誤解してくれているので「そう、そうなの」と適当に相槌を打っていると彼女の視線がようやくグルナに向いた。

「で、誰」

先ほどの真幌さんの予想外の関心であたしは考えていた言い訳プラス口実を完全に脳内から消去しきっており「ふえっ」と間抜けな声を上げてから少し考えて口を開いた。

「ぐ、グレン！ 柘榴ざくろ 紅蓮くれん！ 実は諸々の事情で

咄嗟の名前にグルナは僅かに顔を顰めたがすぐにあたしから顔を逸らした。

因みにこの後の、真幌さんへの言い訳は約三十分に渡った。

言い訳全部を吐き切ったところで「じゃあ、ご飯にしようか。もう直ぐいっくんも帰って来ると思うし」と真幌さんは再びキッチンへと戻って行った。

いっくん、弟を示す言葉に玄関を一瞥してから「ねえ、グルナ」

「あ？」

こちらに振り返るグルナに歩み寄ると「真幌さんとか弟になんかしたら駄目だからね」と釘を刺しておく。グルナは「ふん」とあたしから顔を逸らすだけでそれ以上は何も言おうとはしなかった。

あたしがそれを肯定の台詞だと信じて近くの椅子に腰を下ろすと「たっだいまー」と馴染みのある声が聞こえた。

「あ、いっくんお帰りなさい」

「お帰り、弟」

椅子に座っているあたしを見て、弟は「あ、姉さん。帰って来たんだ」と感心したような声を上げた。

弟は名を出夢という。だから面白半分で真幌さんは弟のことを「いっくん」と呼んでいて、あたしは基本的には「弟」としか呼称しない。

弟はあたしが退院しているという事実「おめでとう」とも「なんで戻ってきたんだ」とも言わず二音つを床に投げ捨てるどぴたりと固まった。彼の視線がグルナで止まっている。「何そのちっこい

の！」と思っていたのに放たれた台詞は真幌さんと丸つきり同じだった。「名前は！」きらきらと弟の言及と瞳がこちらを見る。

「ポチ！」

ほぼやけくそのあたしの台詞に『シャーレ』は「むきゅっ」「と小さな手を挙げた。

？

夕飯を終えて、自室に倒れ込むと自然と眠気が瞼に押し掛かって来た。

叔母さんは結局今日は急な仕事が入ってしまったということで帰って来なかった。真幌さんは「グルナ君は空いてる部屋があるから今日は其処でいいよね」と部屋の準備までしてくれた。あたしの隣の部屋なのが大変気掛かりだがまあいいだろう。

天井を見上げながらあたしの思考はやはり昨日の出来事へと向けられた。

確か、フィールといったグルナと同類殺人鬼君だ。でも、それ以上も以下も無くあたしには彼の一言が引っかかっていた。

『それが僕の宿主の願いだから、かな』

あたしの、生き延びたいという望みがグルナに受け入れられてこんなトンチキ状況に巻き込まれているのだとしたら奴の同類、つまりフィールさん他四人の場合も同じなのだろうか。願いを聞き入れて、身体を借りている。

だとしたら、何故あたしが狙われなきゃならん。

残念ながらあたしには超能力的な能力も、未来へとトリップする力も、異世界へと渡る特技も無いし、万人を魅了するような魅力すら持っていないのだから狙われる道理が全く分からない。あたしが恨まれる、ということが万一にあったとしよう、恨んでいるのは誰だ。「分かんない」これがあたしの回答だ。こう見えてもあたしは他人を傷つけないように細心の注意を払っているつもりだ。

でもだとしたら、何故フィールさんの宿主　恐らくあたしのように身体を貸している人間の呼称だろう　の望みがあたしの死なのだ。

分からないことを考えても頭の中がこんがらがるだけ、だからあたしは思考を放棄した。

翌日、あたしは退院後初登校となった。

部活で早く出て行く弟を見送ってから三十分ほどの間隔の後に「行って来ます」と扉に手を掛け「あ、そうそう」玄関まで着いているグルナを見返しながら「付いて来ないでよね」

「んでだよ」

「なんでも。あたしだって学問に集中したいの」

そう言い放つと「じゃあね、ちゃんと留守番しててね」どうせ今日も真幌さんは此処に居るんだろう。

後ろでグルナがぎゃーぎゃー騒ぐのを聞き流しながらあたしは通路のアスファルトを踏み締めた。冗談じゃない、学校まで着いてこられたところで面倒見切れないぞあたしは。

そう自分に言い聞かせて、校門へと急ぐ。

教室まで向かうとクラスメイト達に好奇の瞳で見られた。まあ、屋上から落ちたポケ女が二日三日で戻ってきたのだからそりゃ驚くだろう。

だがかといって「実は、私怪物に救われてえ」などと真実を言う訳にも行かないので「体質で」という訳の分からない言い訳に逃げた。流石現代っ子なクラスメイトは「そっかあ」で言及をやめてくれた。うむ、助かる。

そうこう考えているとあたしの元まで黒髪を揺らして、親友が現れた。「むーちゃん」

「あ、桔梗。おはよう」

「おはようじゃないわよ。あんた、大丈夫なの」

あたしの隣の席に座っていた男子生徒を押し退けながらこちらを

覗き込む彼女に「平気」と返答し「御免」と小声で親友の暴拳を押し退けられてしまった哀れな彼に謝罪する。

「お医者様はなんて」

「脅威の回復力だつて」

まあ人並み外れた怪奇パワーのお陰なのだから仕方ない。

開業を告げるチャイムが鳴り響き、「桔梗、戻れば」あたしの言葉に仕方なしといった様子で彼女は自分の席へと戻って行った。

？

授業中、はつきり言えばあたしは目前の教師の授業なんてものに耳を傾けてなど居なかった。

肉体はだらりと机の上になだらけさせておき、神経はただひらすらに自分の考えを纏めるのに精一杯で、少なからず数字が踊っているような黒板を模写するでも、教師の言葉に神経の一部を貸してやる余裕すら無かった。

幸いなことにも、教師はあたしがこんな体勢であろうとお構い無しに授業を進めているらしいのであたしもお構い無しに窓の外へ視線を投げ掛けていた。

最高に馬鹿げてると思う。正直、こうとしか言いようが無い。突然現れた男に巻き込まれて、明らかに常識の範疇を凌駕した世界に飛び込んでる。そんなことがあって堪るか。でも実際あったから困ってる。

あたしは生き返った。そしてまた死にそうになってる。もう既に脳神経が幾つもやられてて実はあたしの夢なのかもしれない。でも頬を引つ張つても夢は覚めなかつたのでこれはマジもマジ。大マジの現実らしい。夢であつてすら欲しかった。

頭に手を当てて、ぐしゃりと髪を掻き乱す。額がこつんと机に当たつて、ひんやりとした感覚を得た。

それがなんとなくフィールさんの襲撃と重なって、ぞわりと背筋が寒くなった。

『あれ』は何時、またあたしを襲いにやって来るだろうか。学校まで来られたら正直お手上げだが。グルナには来るなと言つてある。あたしの予想でしかないが来ないだろう、あいつは。

「他に三人」独白が思わず口から零れる。五感の化け物というくらいなんだ、グルナが視覚でフィールさんが聴覚だとするとあとは嗅

覚、触覚、味覚だ。

もう一度、校庭のほうに視線を向けようとすると教師があたしの名を呼んだ。

午前中の授業が終えたことを告げるチャイムが鳴ると我が学友達は一斉に学食へと駆けて行った。「むーちゃん」桔梗はあたしの前に来ると「わたし学食に行くけどむーちゃんはどうする」

「あたしは、いいや。真幌さんがお弁当作ってくれたし」

「そつ。分かったわ」

手を振って、また後でねとでも言いたげな桔梗に小さく手を振り返すと彼女は数人の女子の輪に戻って行った。

うちの高校は基本は学食、売店、弁当持参のどれかで昼食を摂る決まりになっている。あたしは、真幌さんがついでだからと作って下さるお弁当を持っていることが多く学食は愚か、売店すら年に三回使うか使わないかというレベルだ。

しかし、桔梗を含めた我が学友達皆、弁当を持参して来る生徒は少なく現在教室に残って弁当を突付いているのは五人程度だしその内女子はあたしだけだった。

「むー」玉子焼きの中に入っているホウレン草を必死で取り除いていると頭上から男子の声が聞こえて頭を僅かに上げる。「なんの用」我ながらぶつきら棒な第一声。

「前いい？」

「ご勝手に」

それだけ言って再びホウレン草除きに集中し出すと「なあ、むー」もう一度、顔を上げる。

「何。あたしはこの通り忙しい」

「いや、お客さん」

くいくい、と扉の方を示す奴に釣られて入り口付近を眺めると見

慣れない女生徒がこちらを黙って見つめていた。

「あたしに？」

問えば「お前に。あと僕にも」訳が分からん。

一度箸を置いて立ち上がると、「あたしの弁当食べたら承知しないから」と言い残し、あたしは扉へとゆっくり足を運んだ。

?

近くで顔を見てもやっぱり彼女に見覚えは無かった。

茶髪掛かった髪を二つ結びにした彼女は自分の方へと歩み寄ってくるあたしを見るなり顔を輝かせた。

紺色のブレザーを羽織るだけで前だけを空け、赤と黒のチェックのネクタイとそれと同色のスカートは紛れも無くあたしと同じものであるが暑いのか第二ボタンまで開かれたその着こなしを見る限りあまり礼儀正しいとも言えそうに無い。まあ、ネクタイゆるゆるのあたしがいえた台詞では無いが。

「突然お呼び立てして申し訳ありません」

ぺこりと頭を下げる彼女に倣ってあたしも頭を下げる。

その際に見えた上履きが彼女が一年であるということ^を主張していて「一年生」と思わず独白を口に出した。

「はい。あ、アタクシ、一年の前園ルカと申します」

再びへこりと下げられる頭にこちらまで恐縮しながらちらりと時計を見やる。残酷なことに、秒針は止まる気配を見せず奴が一周することに更に分針までかちりと音を立てて動いて行く。

「ご用件は」昼飯を食べる時間が無くなったらそれは堪ったもんじやない。見知らぬ女子に告白されるなんて男子的ゲーム的展開は百パーセント無いと言い切れるが知らない一年女子から声を掛けられる理由なんて殆ど思い浮かばない。

二つ結びの髪がふわりと揺れる。「放課後、お時間を頂けないかと思ひまして」

とても素敵なことにあたしに所属部活は無かった。強いて言えば帰宅部で、要するに放課後はとてつもなく暇を持って余している。ともかく目前にある昼食タイムを死守することに頭が一杯だったあたしは「別に大丈夫だけど」

血色のいい唇が弧を描き、次いで「有難う御座います」と礼を述べて小さな背を精一杯伸ばしてあたしの耳元まで口を近付けると、「第二理科室でお待ちしてます」と囁き「では放課後に」と身を翻していく。

それだけか。小さく肩を竦め、あたしは席へと戻ることに決めた。一体何の誘いなのかはわからないが少なからず愛の告白ではないと信じて、そうだなお茶の誘いだとも割り切ろう。と思いを馳せる。

クラスメイトの好奇の視線を潜り抜け、椅子に腰を下ろすと「知り合い？」目前の学ラン男子の問い掛けに「いんや」と首を振る。それから

「あなたの知り合いじゃないの？」

「違うけど」

そういつて休まず箸を動かしていた手が止まり「このグリーンピースを進呈してやろう」とあたしの弁当箱に緑色が映える。

「馬鹿野郎」軽い罵倒の台詞と共に緑色を返却すると「あなたにはこれもくれてやる」と橙色の丸をオマケしてやった。

「追加攻撃は卑怯だろ」

「だったら最初っからグリーンピース進呈大作戦を決行するんじゃない」

玉子焼きを口に含んでから小さく息を吐き出して立ち上がる。

前園ルカは、後々あたしにとって面倒な存在になるとも知らずに、更についてを言うならばこの、目前に居る奴、最上由夜もがみゆつやもまた、

完璧な関係者だった……らしい。

ともかく、あたしの日の常と書くものは少しずつ壊れて行っていた。という後付けの台詞を考えてみた。

？

左から右へとすらすら抜け落ちていく教師の声をほんの少しの脳神経で留めてゆっくりと脳内で消化しつつあたしは先ほどの彼女の存在に対して思考を巡らせた。

あの、前園ルカと名乗った彼女はあたしの目を通す限り、とても普通の女子高生だ。そしてあたしとはなんの接点も無い筈である。あそこが初対面。

だから、全くもって第二理科室に放課後呼び出される意図が分からない。愛の告白で無いということだけは確証を持っていえるのだが。

小さく溜め息を吐き出して、ゆっくりと黒板を見やった。

ということ、放課後。あたしは掃除当番としてやるべき任務を全て終わると階段を駆け下りて、理科室まで歩み寄った。

第一と第二、手前の第一をスルーすると第二の扉に手を掛け、ゆっくりと引く。

レールに扉が擦れる音と共にこの間改装された(らしい)理科室へと足を踏み入れる。一步、また一步。奥に進んでも前園ルカの姿は全く見えなかった。

もしかや彼女も掃除当番なのではないか。そう考えたあたしは理科室の机に腰を下ろすと天井を見上げた。

あまりにも退屈で、しかし本を読むには余裕が無く、仕方ないので蛍光灯の間を行き来する電子を目で追おうと無謀な挑戦をしていると「むー？」開いた扉と共にまたしても見慣れた、くたびれた学ラン姿が目映る。

「なんだ、お前もルカとかいう子に呼ばれたんだ」

「まあ」

短く返答すると「遠山五月蠅くなかったのか」五月蠅かったともさ。振り切るのに苦労するくらいには。

「別に」

ただ、こいつに真実を教えてやる義理は特に無いので適当に返事すると「あっそう」と向こうも適当に返事をして来た。

本当のところ凄く早く帰りたいんだ。あたしは。グルナのことも大変気掛かりだし。いくら真幌さんでも怪物相手じゃ長く持たないだろう。

天井を見上げて、今度は電子を数えようと試みるとそれは唐突に起こった。

電子の流れは中断され、明かりを配給していた蛍光灯は少しも光らなくなった。

「停電か？」奴の不思議そうな声が響き、瞬間、開いていた扉が閉まる音がした。

幸い、カーテンは開いているためかそこそこの光があるものの薄暗いその理科室で閉じ込められるという状況は何分初めてだ。あたしは内心焦りつつも引き戸まで歩み寄ると一気に引いてみる。

しかし、その扉はつかえ棒でも食わされたのかビクともせず、あたしがびくりとした。

「開かない」

「密室かよ」

溜め息交じりのあいつの言葉にあたしが机にまた腰掛けたそのとき。

ぱちり、という何かが弾けるような小さな音と誰かが目の前に姿を現した。

？

教室に入ってくる明かりだけでも、その場に立っているのがフィールさんでないことをあたしに知らせていたのでなんとなく安心した。

黄色ジャケットに、白い文字で英文が書いてある。尤も訳す気にはなれなかったし、気にもならなかった。下は白いＴシャツのようで、更にその下にはデニムのミニスカートがある。すらりと伸びた細い足がよく見える。大体あたし達と同じ年くらいだろう。

短く切られた金髪を揺らしながら、彼女は口元で弧を描くと「こんにちは」

「最上、知り合い？」

「全然」

ふるふると首を振る学ラン もとい最上だったが彼女はもう一度くすりと笑い「あたしが知ってるのは貴方達のイムだけだ」

イム、その単語に聞き覚えが無いようなあるような。曖昧な記憶に鞭を振るって必死に思い出そうとしていると「でも、居ないんだ」ばかり、とまた何かが弾ける。

明かりに見せられた彼女の瞳は、金色だった。「どうすれば出てくるかな」そう言われても困る。

少なからずこの生徒ではないと確信したがそれにしたってそれ以外なんだか分からない。頭が上手く働かないし何かを話す気力すらないし、最上も何も言わない。

こてんと首を傾げてから「じゃあ、少し荒い方法だけど」と彼女が地面を蹴り上げた刹那だった。

低い激突音したかと思えば、彼女は理科室の机に押し付けられていた。

「がぁ、つぁ……！」

「よう、ツイオ。俺の宿主になんの用だ」

もう聞き慣れていないとは言えない声、赤い髪が風に晒されてふわりと揺れた。

左手で彼女の首を押さえ込み、机へと押し付けている人物はもうここ数日見すぎていて見飽きるどころかもう見たくすらないと思っ
ていた奴だった。

「グルナ！」

あたしの声に僅かに振り返ると「だから一人で歩かせたくなかつ
たんだよ」と吐き捨てて苦しそうに呻く少女を押さえに掛かる。

イム、そうか思い出した。昨日グルナに聞かされたばかりの単語
では無いか。要約するにグルナの同類、その総称だ。

ということは、このグルナに押さえつけられている彼女もまた何
かなのか。全く、勘弁してくれ。

にしても。最上を見ながら思う。先ほど、この彼女は「貴方達」
とあたしと最上を呼称した。あたしだけなら「貴方」だろうし、そ
もそも最上をここに呼ぶ理由も無い。

嫌な予感が脳裏に過ぎっていると案の定、最上は唐突に口を開い
た。

「ナーリア、居るんだろ」

蛍光灯を流れる電子の流れが回復したかと思うと先刻、どんなに
頑張っても開かなかつた扉がまるであたしが開く方向を間違ってい
たかのようにあっけなく開き、そして誰かが入室して来た。

目に悪いほど真っ白な飾り気の無いワンピースに白髪を呼ぶには
あまりに綺麗過ぎる長い髪、銀色の瞳があたしを一瞥してから最上
に向けられる。

「……終わった」

虫の羽音にすら掻き消されてしまいそうな声に「ん、何かなのか
よく分からないけど分かった」と返答すると「お前の仲間？」と最

上は真つ白少女（命名あたし）に問い掛けた。

彼女は僅かに首を上下させると「グルナ、ツイオを離して」

その声に決まり悪そうに舌打ちするとグルナは彼女からゆっくり手を離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1632t/>

鷹と彼女と柘榴石

2011年8月6日03時31分発行